

# 春秋優劣論における「春のあけぼの」

—手習卷の浮舟の歌の「袖ふれし人」をめぐって—

島 本 あ や

## 一、序

本論で主な問題としたいのは次の歌である。

闇のつま近き紅梅の色も香も変らぬを、春や昔のと、こと花  
よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにける  
にや。後夜に關伽奉らせたまふ。下臈の尼のすこし若きがあ  
る召し出でて花折らすれば、かごとがましく散るに、いとど  
匂ひ来れば、

A 袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあ  
けぼの

(手習⑥ 三五六頁)

出家を遂げた浮舟が春の朝に詠んだのがA歌である。本節ではここに「春のあけぼの」を詠んだ意味、および浮舟の意識において「袖ふれし人」は誰であるのかについて考えていく。

## 二、春のあけぼの

まず、ここに「春のあけぼの」を詠んだ意味について考えてみたい。もちろん、詠歌現在が春であつて朝であるから、ということもあるだろうが、春の曙が詠まれた和歌は多くない。そうであれば、どうしてこの歌ことばを詠みこんでいるのかについては考えなくてはならない。

『源氏物語』中の春の曙の用例は次に挙げる二例である(注1)。

女君に「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる本草の花に寄せても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな」と、「公私の営みしげき身こそふさはしからね、いかで思ふことしてしがな」と、「ただ御ためさうざうしくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひきこえたまふ。

(薄雲② 四六五頁)

御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、

見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。

(野分③ 二六五頁)

薄雲巻で光源氏の発話によつて紫の上が春の曙に心を寄せることが分かる場面と、野分巻で夕霧が紫の上を垣間見する場面である。両方とも紫の上関連で用いられていること、秋に対する春という意識が見られることを確認しておきたい。後者については、薄雲巻の光源氏の発話については、秋好中宮が秋を好むのに対して、紫の上が春を好むとされ、春と秋の対応が見られる。野分巻の夕霧による紫の上垣間見では、今の季節が秋であるのに春の曙が用いられており、ここでも秋に対する春のものとして用いられていると言えよう。

次に、和歌において春の曙が詠まれることは多くないものの、次のような用例があることが注目される。

恋しさもあきのゆふべにおとらぬは霞たな引く春のあけぼの  
(和泉式部統集・一八八・夜、いもねぬに、障子をいそぎあけてながむるに)

物あはれなる春のあけぼの／虫のねのよわりし秋のくれよりも

(俊頼髓脳・三八八・重之／修行者)

この二首の用例から、春の曙は秋と比べて春の良さを詠むときに

用いられることがあると言えよう。A歌の春の曙も秋と比べての春の良さを詠んでいるのではないか。「袖ふれし人」である春の男君のほうが秋の男君より良いと詠んでいると考えたい。そのように考えたときに、秋の男君として考えられるのが中将である。中将はその登場から秋の景物に彩られている。

尼君の昔の婿の君、今は中将にてものしたまひける、弟の禪師の君、僧都の御もとにものしたまひける、山籠りしたるをとぶらひに、はらからの君たち常に登りけり。横川に通う道のたよりによせて、中将、ここにおはしたり。前駆うち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出して、忍びやかにておはせし人の御さまけはひぞさやかに思ひ出でらる。これもいと心細き住まひのつれづれなれど、住みつきたる人々は、ものきよげにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲きはじめたるに、いろいろの狩衣姿の男どもの若きあまたして、君も同じ装束にて、南面と呼び据ゑたれば、うちながめてゐたり。年二十七八のほどにて、ねびととのひ、心地なからぬさまもてつけたり。

(手習⑥ 三〇四—三〇五頁)

撫子、女郎花、桔梗などの秋の花ともに、中将は登場する。そして、この秋に、中将は浮舟に恋情を訴えていく。

あだし野の風になびく女郎花われしめ結はん道とほくとも

(手習⑥ 三一二頁)

松虫の声をたづねて来つれどもまた荻原の露にまどひぬ

(手習⑥ 三二五頁)

この二首は中将が詠んだ歌であるが、返歌は妹尼がしている。浮舟が中将が言い寄ってくることに、次のように思う。

荻の葉に劣らぬほどに訪れわたる、いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにしをりをりも、やうやう思ひ出づるままに、「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放はすべきさまにとくなしたまひてよ」とて、練習ひて読みたまふ心の中にも念じたまへり。

(手習⑥ 三二二—三二三頁)

このように中将の煩わしさを思っているのである。また、次に挙げる二首の歌は前者が中将の歌、後者が浮舟の歌であり、贈答となっている。

山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は思ひこそ知れ

(手習⑥ 三二八頁)

うきものと思ひも知らですぐす身ともの思ふ人と人は知りけり

(手習⑥ 三二八頁)

やつと中将は浮舟の返歌を得たわけであるが、浮舟はこの直後に出家するのである。

このような秋の男君としての中將を煩わしいものとして退け、春の男君である「袖ふれし人」を回想するのが「春のあけぼの」の表現なのではないか。

三、袖ふれし人の香の回想

このA歌およびその直前には豊富な引き歌が指摘されているので先に挙げておく。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして  
(古今集・卷十五・恋五・七四七・五条后宮西の対に住みける人に、本意にはあらでも言ひわたりけるを、睦月の十日あまりになむ、他所へ隠れにける。在り所は聞きけれど、えものも言はで、又の年の春、梅の花盛りに、月の面白かりける夜、去年を恋ひて、かの西の対に行きて、月の傾くまで、あばらなる板敷に伏せりて、よめる・在原業平朝臣／他)

飽かざりし君がにほひの恋しさに梅花をぞ今朝は折つる

(拾遺集・卷十六・雑春・一〇〇五・正月に人々まうで来たりけるに、又の日の朝に、右衛門督公任朝臣のもとに遣はしける・中務卿具平親王／他)

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ども

(古今集・卷一・春上・三三三・題しらず・よみ人しらず)

A歌の「袖ふれし人」が誰であるのか、先行研究でも議論されており、決着はついていない。大きく分けて、薫、匂宮、両方、誰でもない、の四説があると言える。ここでは薫説、匂宮説について検討してみたい（注2）。

まず、薫説をとるのが、高田氏である（注3）。

実は梅の香に喩えられるのは圧倒的に薫が多く、匂宮は薫香に工夫を凝らし薫と張り合うものの、むしろ梅を賞美する人と位置づけられていた。しかも、薫が梅の香に喩えられる場合、次の二首を多く引き歌とする。

（ア）色よりも香こそあはれと思はゆれ誰が其れふれし宿の梅ども

『古今集』春上 読人しらず

・はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く

（匂兵部卿(5)二七）

・さらば袖ふれて見たまへ。（中略）まことは色よりも

（竹河(5)六九）

・袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる

（早蕨(5)三五七）

（イ）春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる

『古今集』春上 躬恒

・闇はあやなく心もとなきほどなれど

（匂兵部卿(5)三四—三五）

・人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜の闇

（竹河(5)七三）

・闇はあやなきを、月映えはいますこし心ことなりとさだめきこえし。

（竹河(5)九八）

・闇はあやなきたどたどしさなれど

（早蕨(5)三五〇）

・「闇はあやなし」とおぼゆる匂ひありさまにて

（浮舟(6)一四七）

（ア）と（イ）の第三部での使用数は、（ア）は掲げた三例のほかにもう一例、今問題にしている（B）歌（筆者注：本論のA歌のこと）で引かれ、計四例。（イ）は掲げた五例ですべて。いわば、（ア）と（イ）は薫のために用いられる引歌と考えてよく、（B）歌も（ア）を引くことにより「袖ふれし人」を薫と推せる。また、（イ）も「II」の場面（筆者注：本論のA歌を含む先掲の範囲）および（B）歌と通底する。（イ）の「春の夜」と「II」の「後夜」、（イ）の「色こそ見えね」と（B）の「人こそ見えね」が対応する。引歌とは呼べないが、「II」の場面および（B）歌と同一の発想の歌である。こうして見ると、（ア）と（イ）は色に対する香の優位性という共通点を持つことが知られる。それは薫という人物を表すのにいかにもふさわしいのである。

このように、読者は今までの物語から「袖ふれし人」に薫を想起することができよう。そして、語り手もまた「袖ふれし人」に薫を重ねることもできるように語っていると言えよう。しかし、こ

のような引歌は、浮舟のまわりでは用いられていない。だとすれば、浮舟自身の意識として薫を「袖ふれし人」と詠む必然性はないのである。

そして、匂宮説を主張するのが金氏である（注4）。御法巻で紫の上から匂宮に二条院の紅梅と桜を形見として残したことに触れた後、紅梅巻の記述から次のように述べている。

ここで取り上げられている「紅梅」は、匂宮の常識を覆すほど、色も香も具している紅梅である。大納言にとつて見れば、自慢の我が子のイメージであらうし、匂宮にしてみれば、紅梅の持ち主で、かつてから思いを寄せていた宮の御方のイメージであろうが、それはいつの間にか匂宮自身のイメージに結びつけられてしまった印象を残すのである。しかも（II）で（筆者注：紅梅 ⑤五〇～五二頁）「花も恥づかしく思ひぬべくかうばしくて」とあるのを見ると、匂宮と紅梅との関わりが、匂宮と紅梅の香との関わりにまで及んでいることが窺える。

また、A歌の「袖ふれし人」については、次のように述べている。

以上のように、浮舟は、匂宮との出会いにおいて香りを認識しているし、しかも、一人でそれを思い出している場面から本格的な内面叙述が語られはじめる女君である。浮舟と匂宮との出会いにおいてそれだけ香りが重要であったわけで、従って、手習巻の「袖ふれし人」の問題を、浮舟の記憶という線に沿って、過去の物語世界と整合させるならば、その対象

は当然匂宮であろう。

浮舟の詠歌意識を考えるならば、このように「袖ふれし人」に匂宮を想定するほうが自然だと考えられる。もう一度、本文と照らし合わせて確認したい。

匂宮が薫のふりをして初めて浮舟と逢った正月には、

いと細やかなよなよと装束きて、香のかうばしきことも劣らず。

（浮舟⑥ 一二四頁）

と語られているので、A歌の前に「飽かざりし匂ひ」と語られることも合致するのである。

#### 四、袖ふれし人の春の回想

また、匂宮に浮舟が連れだされ歌の贈答があった次の場面も春のものだ。

「かれ見たまへ。いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

年経ともかはらぬものか橘の小島のさきの契る心は女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬをりから、人のさまに、をかしくのみ、何ごとも思しなす。

（浮舟⑥ 一五一頁）

この橘の小島の思い出は後から次のように回想される。

宮を、すこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけしからぬ、  
ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島の  
色を例に契りたまひしを、などてをかしと思ひきこえけん、  
とこよなく飽きにたる心地す。

(手習⑥ 三三一頁)

それほどに浮舟に強烈な印象を残している。

また、次の場面について考えてみたい。これは浮舟の手習の歌  
を書く場面である。

年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬ  
さへ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと  
思ひはてにたれど、なほそのをりなどのことは忘れず、

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も  
悲しき

など、例の、慰めの手習を、行ひの隙にはしたまふ。我世に  
なくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思  
ひ出づる時も多かり。若菜をおろそかなる籠に入れて、人の  
持て来たりけるを、尼君見て、

山里の雪間の若菜つみはやしなほ生ひさきの頼まるるか  
な

とてこなたに奉りたまへりければ、

雪ふかき野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべ

き

とあるを、さぞ思すらんとあはれるなるにも、「見るかひあるべ  
き御さまと思はましかば」と、まめやかにうち泣いたまふ。

(手習⑥ 二三四—三五頁)

「君にぞまどふ」とのたまひし人は句宮のことである。春の水  
や雪は句宮に連れだされた場面にもあったものである。

雪の降り積もれるに、かのわが住む方を見やりたまへれば、  
霞のたえだえに梢ばかり見ゆ。山は鏡をかけたるやうにきら  
きらと夕日に輝きたるに、昨夜分け来し道のわりなさなど、  
あはれ多うそへて語りたまふ。

「峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞまどふ道はまどは  
ず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習  
ひたまふ。

降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にてぞわれは消  
ぬべき

と書き消したり。この「中空」をとがめたまふ。げに、憎く  
も書きてけるかなと、恥づかしくてひき破りつ。

(浮舟⑥ 一五四頁)

浮舟はこのような句宮の思い出を、春なのに氷や雪があるという  
眼前の景から思ひ出しているのである。

このように、浮舟にとつて春の印象が強い句宮を想起して歌を  
詠んだのではないだろうか。

## 五、袖ふれし人の紅梅の回想

先に、薫の芳香について梅の引歌を用いる表現は浮舟のまわりにはないということを述べた。それでは、紅梅を匂宮と結びつける表現も浮舟のまわりにはないのかという反論もあろう。しかし、匂宮と浮舟の逢瀬の場面で紅梅が見られるのである。景物ではなく、浮舟の衣装であるが。

今日は乱れたる髪すこし梳らせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく着かへてゐたまへり。

(浮舟⑥ 一五五頁)

「君にぞまどふ」の歌が詠まれたのと同じ場面である。浮舟は自ら着ていた衣に触れたその人、匂宮を回想してA歌を詠んだのであろうとここから考えることができる。

## 六、結

A歌の「春のあけぼの」が春秋優劣論の表現に見られることから、秋の男君である中將に対して、春の男君である匂宮を回想しての表現であると述べた。また、浮舟としてはA歌において匂宮を回想していたことを、匂宮の香、春の思ひ出、浮舟が紅梅の織物を身にまとっていたことなどから確認した。

## 注

※『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）に、三代集の本文は『新編日本古典文学全集』（岩波書店）に、それ以外の歌集の本文は『新編国家大観』（角川書店）による。

(1) 春と曙であれば、次のような例もある。

御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞の中かと見わたさる。

(初音 ③一五九頁)

(2) 両方説としては三田村雅子「移り香の宇治十帖」『源氏物語感覚の論理』有精堂 一九九六年）、どちらでもない説としては藤原克己「袖」ふれし人は薫か匂宮か——手習巻の浮舟の歌をめぐる——『源氏物語と和歌世界』新典社 二〇〇六年）が挙げられる。確かに「袖ふれし人」は薫、匂宮のどちらとも考えられ、そのこと自体に意義を認めるという考えには肯けるが、ここでは浮舟の詠歌意識を重視したい。

(3) 高田祐彦「浮舟物語と和歌」『源氏物語と文学史』東京大学出版会 二〇〇三年）

(4) 金秀姫「浮舟物語における嗅覚表現——「袖ふれし人」をめぐる——」『国語と国文学』七八巻一号 二〇〇一年）

(しまもと・あや／東京学芸大学大学院修士課程)